

短報 Short Report

東広島市におけるエコミュージアム見学ツアーの需要

浅野敏久¹・清水則雄¹・佐藤大規¹・菊地直樹²

Potential demand for eco-museum excursions in Higashihiroshima City

ASANO Toshihisa¹, SIMIZU Norio¹, SATO Taiki¹ and KIKUCHI Naoki²

要旨：エコミュージアムにおいて、地域に散在する遺産をどのように結びつけるかは1つの課題である。1つの解決策として、域内をめぐる見学ツアーを提供することが考えられる。本稿の目的は、東広島市で想定できるエコミュージアム・ツアーにどの程度の需要が見込めるのかを示すことである。そのために、広島県民へのウェブアンケート調査と、広島大学学生の意見調査を行った。ウェブアンケートからは、エコミュージアムに関心をもつ層が3分の1おり、ツアーへの参加希望は、「水と酒」をテーマとするものが56.0%、「生物と農村生活」で44.9%、「バイオマス関連」で40.3%、「伝説と歴史」で30.3%であることが示された。また、学生の意見としては、大学のある地域について知る機会を大事にしたい、日常的に自然に接する機会が少ないので提示された機会は貴重だと考える者がいる一方、参加費用面でそもそも無理だと判断する者がおり、両者はほぼ半々となった。見学ツアーに対して、広島大学総合博物館単独での実施能力を大きく上回る潜在的な需要があることが確認できた。

キーワード：エコミュージアム、見学ツアー、大学博物館、都市農村交流、東広島市

Abstract: Finding ways to connect scattered heritages in an eco-museum constitutes an issue. Solutions include providing excursions around the region. This article aims to demonstrate how much demand can be expected for the excursions of an eco-museum in Higashihiroshima City. To this end, an online questionnaire survey was administered to citizens of Hiroshima Prefecture, and an opinion survey of Hiroshima University students was conducted. According to the online survey, 56.0% of respondents were interested in participating in the excursion on the theme of “water and liquor”, and 44.9% were interested in the excursion regarding “wild living and rural life”. Further, 40.3% were interested in the “biomass-related” excursion and 30.3% were interested in the excursion on “local history and legends”. The opinions of university students were as follows. Almost half the students stated that the presented opportunities are valuable as they want to learn about the area surrounding the university and there are few opportunities to interact with nature in everyday life. Conversely, the other half of participants deemed the participation fee excessively high. The results confirmed that there is a potential demand for excursions, and that it exceeds the capacity that the museum can manage.

Keywords: Eco-museum, Excursion, University museum, Urban-rural exchange, Higashihiroshima city

I. はじめに

日本では、1990年代以降、内発的・持続的な地域づくりを志向する官民協働の活動としてエコミュージアムに取り組むようになった。近年では一時のブームが去って、新しいエコミュージアムが次々と生まれるとか、それぞれのエコミュージアムで新しい取り組みが次々になされるという状況ではなくなっている。そのためエコミュージアムに関わる研究としては、初期によくみられた活動紹介的な研究は減り、この20数

年間の活動を通じて明らかになってきた問題を掘り下げる研究（吉兼2016、馬場2018、大山2018）や、地域社会と博物館の関係（小出・浅野2016）、地域社会と大学の関係（馬場・須田2016、江水2016）、海外との協力・連携などに関わる研究（中川2016、大原2018）などがなされている。ジオパークやユネスコエコパークなどに先駆けて、自然・文化遺産を積極的に地域づくりに結びつけてきたエコミュージアムと、ジオパークやエコパークとを比較する研究の重要

1 広島大学総合博物館：Hiroshima University Museum

2 金沢大学地域政策研究センター：Kanazawa University Center for Regional Studies

性も指摘されている（菊地 2016；2018）。

過去の活動の反省ということでは、日本国内でのエコミュージアム活動は、住民参加を図っても地域の「宝」探しで終わってしまったり、行政に依存しすぎて地域に根ざし切れなかったりという問題を抱えてきた。山形県朝日町のように住民が積極的・主体的に関わる先進的な取り組みはあるが（安藤 2018）、地域に定着して活動を拡張・継続できているエコミュージアムは多くない。また、神奈川県三浦半島では、大学や地域博物館などと連携しながら広域的なエコミュージアムの域内サテライトの有機的連携を図ろうとしている¹⁾。エコミュージアムの必須の要素でありながら、ややもすれば相互の結びつきに欠けるサテライトを、いかに結び付けていくのかは大きな課題である。

広島大学総合博物館は、設立に際してエコミュージアムの考え方を取り入れた。開館は 2006 年で国内のエコミュージアム活動としては後発である。博物館の設立に当たって、小規模博物館であることを逆手に取り、キャンパス全体を博物館とするコンセプトを描いた。現在は、キャンパスまるごと博物館をさらに広げて、キャンパスのある東広島市、賀茂台地を対象とする地域まるごと博物館の活動を進めようとしている。その際にも域内のサテライトをいかに結び付けていくのかは課題となる。来訪者にサテライトの情報を提供して、あとはそれぞれの判断で周遊してもらうだけでは、サテライトをうまく連携させるのは難しい。ガイドや住民有志による見学会、旅行会社などと連携したツアーの提供など、積極的にサテライトを結びつける仕掛け・仕組みをつくることも、本博物館に限らず一般的な意味で、エコミュージアムの連携を図る方法の 1 つとして検討に値する。

各地に DMO（観光地域づくり法人）が組織され着地型観光の開発が志向されるのもその 1 つの表れといえるが、エコミュージアムの場合は博物館活動を模すものであり、域内観光ルートが開発されればなんでもよいというわけではない。しかし、一方で見学ツアーをボランティアで運営するのでは住民に負担をかけるばかりで持続的な取り組みに発展しない。博物館に期待される地域の自然・文化遺産の保全や教育的な利用と、地域への経済的効果、少なくとも関わる住民や組織への経済的還元を期待する観光産業的な利用のバランスをどうとるのかを考えていかなければならない。

本研究では、東広島市を対象とするエコミュージアム（以下、東広島エコミュージアム）を想定したうえで、域内のサテライトを周遊する見学ツアーのルート

を提示し、それについての利用者のニーズや意見を探ることを目的とする。

本研究は、地域まるごと博物館活動を進めたい広島大学総合博物館と、市内周辺地域の観光振興のために周遊ルートをつくりたい東広島市観光振興課とで実施した共同研究²⁾を背景にもつ。この共同研究では、1) 東広島市内のエコミュージアム見学ツアーにかかる地域遺産調査とモデルコースの提案、2) 集客・広報方法の調査と提案、3) 組織運営体制に関する調査と提案を 3 つの柱とし、現地見学や関係者への聞き取り調査を行った。その成果として、5 つの「学び」ツアールートの提案、地域遺産マップの作成、東広島エコミュージアムの紹介ビデオの作成³⁾などが行われた。

この共同研究と並行して始められた本研究は、共同研究で提案したツアーのルートについて、利用者の需要を把握することを目的として行ったものである。本稿で報告するのは、そのために実施した 2 つの調査の結果である。1 つは、東広島エコミュージアムの主な利用者として想定される広島県民を対象としたウェブアンケート調査の結果であり、もう 1 つは広島大学の学生を対象とした東広島エコミュージアムについての意見を分析した結果である。2 つの調査の方法については後述する。

II. 想定した見学ツアー

1. 東広島市の概況

東広島市は、広島県の中央部に位置し約 635km²の市域を有し、そこに 192,907 人（2015 年国勢調査）が暮らしている。東広島市は流域的にまとまった地域というわけではなく、複数の河川流域からなる西条盆地とそれを取り巻く山々、山をはさんだ反対側にある瀬戸内海（三津湾）沿岸までを市域とする。

東広島市の市制施行は 1974 年で、国の賀茂学園都市建設構想を背景に、西条町・高屋町・八本松町・志和町の合併により生まれた。その後、平成の大合併時に豊栄町・福富町・河内町という北部 3 町と黒瀬町・安芸津町という南部 2 町を合わせて、新しい東広島市となった。1975 年に賀茂学園都市建設計画が策定され、広島大学等の移転、工業団地、住宅団地の建設が進んだ。また、市内に 4 つの大学が立地し、大学生・大学院生・留学生、大学の教職員が多く住み、広島市内に通勤・通学する人達のベッドタウンという側面ももつ。

東広島市では、中心市街地が十分な都市核になっていないとの指摘（東広島市、2013）がある反面、市域全体で見ると市の中央部と周辺部の格差が大きい。

人口が増加し宅地開発・都市開発が進む中央部と、過疎高齢化が進む周辺部が対照的である。中央部と周辺部の差は観光面にも認められる。もとより同市は広域的な集客力のある観光地ではないが、観光入込の傾向として、西条酒蔵地区や酒まつりなど市の中心部への観光が中心で、周辺地域を訪れる観光客は多くない⁴⁾。

東広島市は自然環境的にも歴史的にもまとまりのある地域といいにくいので、エコミュージアムを構想する上での難しさがある。しかし、歴史が新しいとはいえ、1つの自治体として地域づくりを進めており、地域をまとめるストーリーが求められている。また、市の中心部と周辺地域の差を埋めることも課題であり、周辺地域への観光の流れをつくるのが市の観光施策上も求められている。本市においてエコミュージアム（東広島エコミュージアム）を構想することは地域に1つのストーリーを与える契機になるとともに、地域をめぐる広域見学ルート開拓が市内の周遊観光ルートづくりにつながる。さらに、住民が市内各地を知る機会の提供や、地域のアイデンティティづくりに寄与することが期待される。

2. 2つの調査時に提示した見学ツアーの案

上述したとおり、本研究では、広島県民を対象とするウェブアンケート調査と、大学生を対象とした調査を行った。まず前提として、この2つの調査において、対象者に提示したツアーの案は同じではない。それは、ツアー案の検討とこれらの調査を並行して行ったことにより、調査時期の違いによって提案した案の数が違う（後になるとツアー案が増える）ためである。ここでは最終的な5つの案を示すが、先行して実施したウェブアンケート調査時には5番目の案は対象としていなかった。その点を留意していただくとして、5つの案を示しておく。

【案1】水に注目して酒造りや米作りを学ぶツアー

東広島市は全国的にも酒どころとして知られている。そこでの酒造りは龍王山系を水源地とする地下水に支えられている。地下水を保全するために、酒造会社を中心に、大学・企業・市民の協働のもとに水源地の里山を保全する活動が行われている。このツアーでは、日本酒、地下水、酒米、水源地、里山保全など、水を介した地域のつながりを、現場を訪れながら学ぶ。

【案2】動物と農村生活との関係を学ぶツアー

東広島市北部には豊かな農山村景観が広がっており、そこでは、さまざまな人と生き物との関わりを知ることができる。合鴨農法、オオサンショウウオ、

ブッポウソウ、獣害、ジビエ、酪農など、訪問者は、農村生活における多様な動物との関係について体験等を通じて学ぶ。

【案3】バイオマス産業都市で再生可能エネルギーを学ぶツアー

東広島市は国のバイオマス産業都市に指定されている。このバイオマス産業都市に関連する施設や活動について、バイオマスセンター、里山再生の活動地、薪を使った生活体験など、各現場を訪れて、再生可能エネルギーをつかった地域活動について学ぶ。

【案4】菖蒲前伝説を追いながら地域の歴史を学ぶツアー

東広島市には源頼政の妻「菖蒲前」の数奇な一生にまつわる伝説が伝えられている。この伝説にまつわる土地を訪れながら、地域の歴史的な生い立ちを学ぶ。あわせて、菖蒲前以外にも郷土史にまつわるスポットが散在している。これら歴史的な遺産を、テーマを定めて幅広く専門家の解説を交えて見て回る。

【案5】小宇宙・三津湾エコミュージアムで海と山と暮らしの関わりを学ぶツアー

波穏やかな三津湾という小宇宙的な空間に、歴史的な町並み、酒造業、カキ養殖を中心にした水産業、ジャガイモやビワ、柑橘類などの農産物生産など、まとまりのある地域を学べる空間になっている。東広島エコミュージアムにおけるサブテリトリーとしての三津湾エコミュージアムを設定し、歴史や自然、産業等のトータルな結びつきと人々の暮らしを学ぶ。

Ⅲ. 広島県民を対象としたウェブアンケート調査の結果

1. 調査の概要

上記5案のうち案1から案4について、広島県民を対象としたウェブアンケート調査を行った。調査は株式会社インテージに委託し、2020年2月26日から28日までの期間に、541件の回答を得た（依頼数4,705人）。広島県内に住所登録をしているインテージ社のモニターを対象に、男女比と年齢階層比が均等になるように回答を集めた。この調査では、モニター登録を前提とする調査であることに加え、性別や年齢構成の配分を均等化する調整を行っているため、結果は、必ずしも広島県民一般を代表するわけではない。一方で性別や年齢階層別など、属性別の比較や傾向の考察を可能とする標本となっている。

質問した項目は、属性以外に次の4つである。1) 日本エコミュージアム研究会の「エコミュージアム憲章2009」によりエコミュージアムの説明をした上で、

エコミュージアムに興味をもつかどうかを5段階評価で尋ねた。2) 地域の自然(枝問1)と文化財(枝問2)のそれぞれについて、「保護・保存」と「開発」をどの程度重視するかを「0:10」、「1:9」、「2:8」…、「10:0」までの11段階で尋ねた。3) エコミュージアムとして地域の自然や文化財を活用する場合に、「教育的な効果」と「経済的な効果」をどの程度重視するかを同じく「0:10」から「10:0」までの11段階で尋ねた。4) 上記の案1から案4までの「見学ツアー」に対する関心を案ごとに5段階評価で尋ねた。その結果は次の通りである。

2. エコミュージアムへの関心・地域遺産活用に対する意識

まず、エコミュージアムについて、興味があると答えたのは回答者の32.6%であった(図1)。エコミュージアムについて、簡単な言葉による説明では理解しにくいことも影響すると考えられる。年齢層別、性別での差について検討したが、年齢層については統計的に優位な差は認められず、性別では男性で「全く関心がない」が有意に高くなった。

地域の自然の保護と開発の比重については、「保護」:「開発」は全体の平均で5.82:4.18となった。保護にやや重きを置くが、両者のバランスを同程度にとることを志向している。年齢層別・性別による傾向を表1に示す。表中の数字は「保護」の点数の平均値である。女性の方が男性よりも保護志向が高く、年齢層的には、男性の30・40代、女性の30・40・50代の保護志向が強い。逆に20代男性は保護と開発が半々となる。

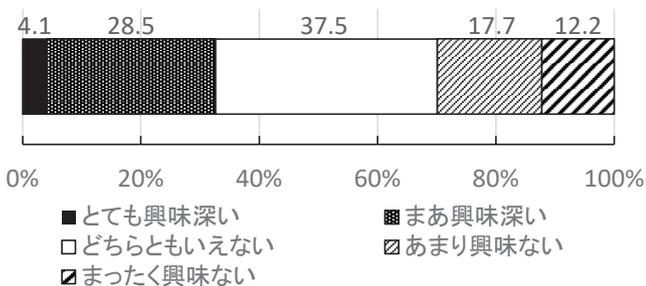


図1 エコミュージアムへの関心 (N = 541)

表1 自然保護と開発の比重

	20代	30代	40代	50代	60代
男性	5.02	5.89	6.05	5.73	5.72
女性	5.55	5.93	6.02	6.32	5.85

注:「自然保護」:「開発」を0:10から10:0の範囲で尋ね、「自然保護」に与えられた点数の平均値

地域の文化財の保存と開発の比重については、「保存」:「開発」は全体の平均で5.83:4.17であり自然とほぼ同じであった。年齢層別・性別による傾向を表2に示す。男性は自然保護と同じ傾向を示すが、女性については、若い世代ほど保存を重視する傾向がみられた。自然の場合と同様に20代男性の保存の点数がもっとも低くなった。

地域の自然や文化財の活用において、「教育的な効果」と「経済的な効果」をどの程度重視するかについて、「教育的な効果」:「経済的な効果」は5.28:4.72となり、教育効果にやや重きを置くものの、両者のバランスを同程度にとることを志向している。年齢別・性別に点数をみると(表3)、男女とも30代で教育効果を重視する傾向が強く、20代男性では経済効果の方が重視され、40代以上の女性は男性と比べて経済効果を志向する。

3. 見学ツアーへの参加意向

次に、Ⅱの2に示した見学ツアーのうち案1から案4までについて、内容を簡単に説明(ほぼⅡの2の記述)した上で、それぞれに関心をもつかどうかを5段階評価で質問した。その結果を図2に示す。なお、アンケートで示したツアーの名称は、1) 水に注目して酒造りや米作りを学ぶツアー、2) 動物と農村生活との関係を学ぶツアー、3) バイオマス産業都市で再生可能エネルギーを学ぶツアー、4) 菖蒲前伝説を追いながら地域の歴史を学ぶツアーであるが、本文および図表中ではそれぞれ1) 水と酒造り・米作り、2) 動物と農村生活、3) バイオマス産業都市、4) 伝説と地域の歴史と省略した表現を用いる。

東広島市の観光の目玉になっている日本酒に関連した見学ツアー「水と酒造り・米作り」については半分

表2 文化財保存と開発の比重

	20代	30代	40代	50代	60代
男性	5.25	5.78	6.21	5.75	6.02
女性	6.19	5.98	5.91	5.80	5.39

注:「文化財保存」:「開発」を0:10から10:0の範囲で尋ね、「文化財保存」に与えられた点数の平均値

表3 自然・文化遺産の活用で教育的効果と経済的効果を重視する比重

	20代	30代	40代	50代	60代
男性	4.80	5.50	5.30	5.36	5.51
女性	5.36	5.58	5.17	5.18	5.06

注:「教育的効果」:「経済的効果」を0:10から10:0の範囲で尋ね、「教育的効果」に与えられた点数の平均値

以上 56.0% の回答者が関心があると回答した。次いで市北部をまわる「動物と農村生活」が 44.9%、「バイオマス産業都市」が 40.3%、「伝説と地域の歴史」が 30.3% となった（図 2）。テーマによって関心のもたれ方に差がみられるものの、もともと観光スポットではない場所を多く回る学習的な内容であることを考慮すると、一定の需要は期待できる。広島大学総合博物館が中心となって見学会を企画する場合は、実施回数や受け入れ可能人数が極めて限られるので、関心をもつ層に情報を適切に伝えることができれば実現は容易であろう⁵⁾。しかし、博物館主催の見学会にとどめず、経済的な効果を生むような規模を考えるならば、事業主体は博物館ではなく民間事業者となるべきであり、博物館が立ち上げ期の仕掛け役を担い、それをうまく民間事業者に広げていくことが望まれる（広島大学総合博物館，2020）。博物館は学習的な内容の実践を堅持し、観光化される前のルート探索の役割を担うべきと考える。段階を追って事業化を考えていく上で、現時点で、関心をもつ層が 3 割から 5 割程度いることは今後の可能性が期待できる。

ツアーへの関心に影響する変数を明らかにすることを、他の設問への回答との関連から試みようとしたが、今回の調査ではなにがツアーへの関心に影響するのかは十分にはわからなかった。表 4 に 4 つの案へ

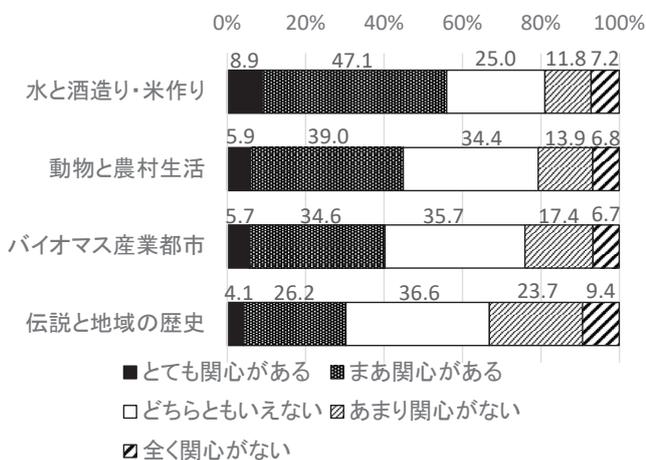


図 2 エコミュージアム・ツアーへの関心 (N=541)

の関心の度合いとアンケートで尋ねた質問への回答との相関係数を示すが、性別、年齢、自然保護志向、文化財保存志向、教育効果志向のそれぞれで参加への関心の示し方とはほぼ相関がないことが確認された。相関係数だけではなく重回帰分析なども試みたが有意な変数は見いだせなかった。保護・保存志向や教育効果志向など、地域の自然・文化遺産に対する意識は、それがツアーへの関心につながるわけではないということである。その中で唯一、アンケートの冒頭で質問したエコミュージアムへの関心は、ツアーへの関心と相関が高くなった。エコミュージアムの考え方に理解を示す層は、地域を実際に回りながら地域を学ぶツアーに関心をもつ。このことから、今後、このような見学ツアーへの関心を高めるために、エコミュージアムの考え方をより広げていくことが大切であるといえよう。

IV. 学生の課題への回答にみられる見学ツアーへの意見

1. 調査の概要

地域をまるごと博物館とみなしたエコミュージアムにおいて、サテライトを見学するツアーを大学博物館が主催して実施する場合、学生の参加を促すことが重要である。大学生にとっても入学を機に東広島に住むことになったものが多く、大学の立地する地域を知ることが大切な経験になるはずであり、その機会を提供することが大学に求められる。そこで、今回想定したツアーに対して大学生が参加したいと思うかどうか尋ねてみることにした。

調査は講義時に受講者に依頼して回答してもらった。2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響で遠隔授業の形式をとっていたので、インターネットを介した講義の課題提出という方法によった。対象者は教養科目の「人文地理学」の受講生で主に 1, 2 年生である。この科目は前期期間中に 2 度開講され、第 1 ターム (4-6 月) と第 2 ターム (6-8 月) に受講時限を指定された全学の学生が受講可能となっている。受講者数は第 1 タームが 131 人 (回答者 129 人)、第 2

表 4 設問間の相関係数

	性別	年齢	エコミュージアムへの関心	自然保護の比重	文化財保存の比重	教育効果の比重
水と酒造り・米作り	-0.16	-0.03	0.59	-0.04	0.02	0.00
動物と農村生活	-0.11	0.07	0.54	-0.09	-0.11	-0.02
バイオマス産業都市	-0.07	-0.05	0.56	-0.02	0.00	0.01
伝説と地域の歴史	-0.10	-0.10	0.57	-0.06	-0.03	-0.02

タームが63人(回答者58人)であった。講義の中でエコミュージアムについて解説し、講義後に質問に答えてもらった。なお、依頼に際し、この情報を東広島エコミュージアムの活動を進めるため、また見学ツアーの実施や改良のために用いることを口頭及び文字情報として伝え、了解したうえで回答することを求め、記述内容を成績評価の対象としないことを断っている。

質問文は、「講義時に紹介した東広島市内でのツアーについて、参加費が5,000円(バス代・食費・体験代含む)⁶⁾だったとして、あなたは参加したいと思いますか。理由とともに回答してください」とした。参加費をあえて示したのは、費用を支出することを意識した上での参加意向を確認したかったからである。

回答は187件、総文字数23,746文字(平均127文

字)であった。この回答の傾向を把握するために、テキストマイニングソフトであるKH Coder(樋口, 2020)を使用し、共起ネットワーク図を作成した。テキストマイニングは、アンケートの自由記述など大量の文字情報から単語や文節の出現頻度や出現傾向などを把握する技法で、共起ネットワーク図は、回答間の共通性(単語の出現頻度と複数の単語が同時に使われる頻度)を単語間の関連具合を線で結び図に示したものである。

図3は、本件についての共起ネットワーク図である。図に示したのは、Jaccard係数⁷⁾が0.1以上の語間の結びつきである。なお、分析に先立ち、同じことを意味していると判断した語を集約するためのコーディングを施した。例えば、「食べる」と「たべる」は同じとしたり、参加し消極的な態度を示すものとし

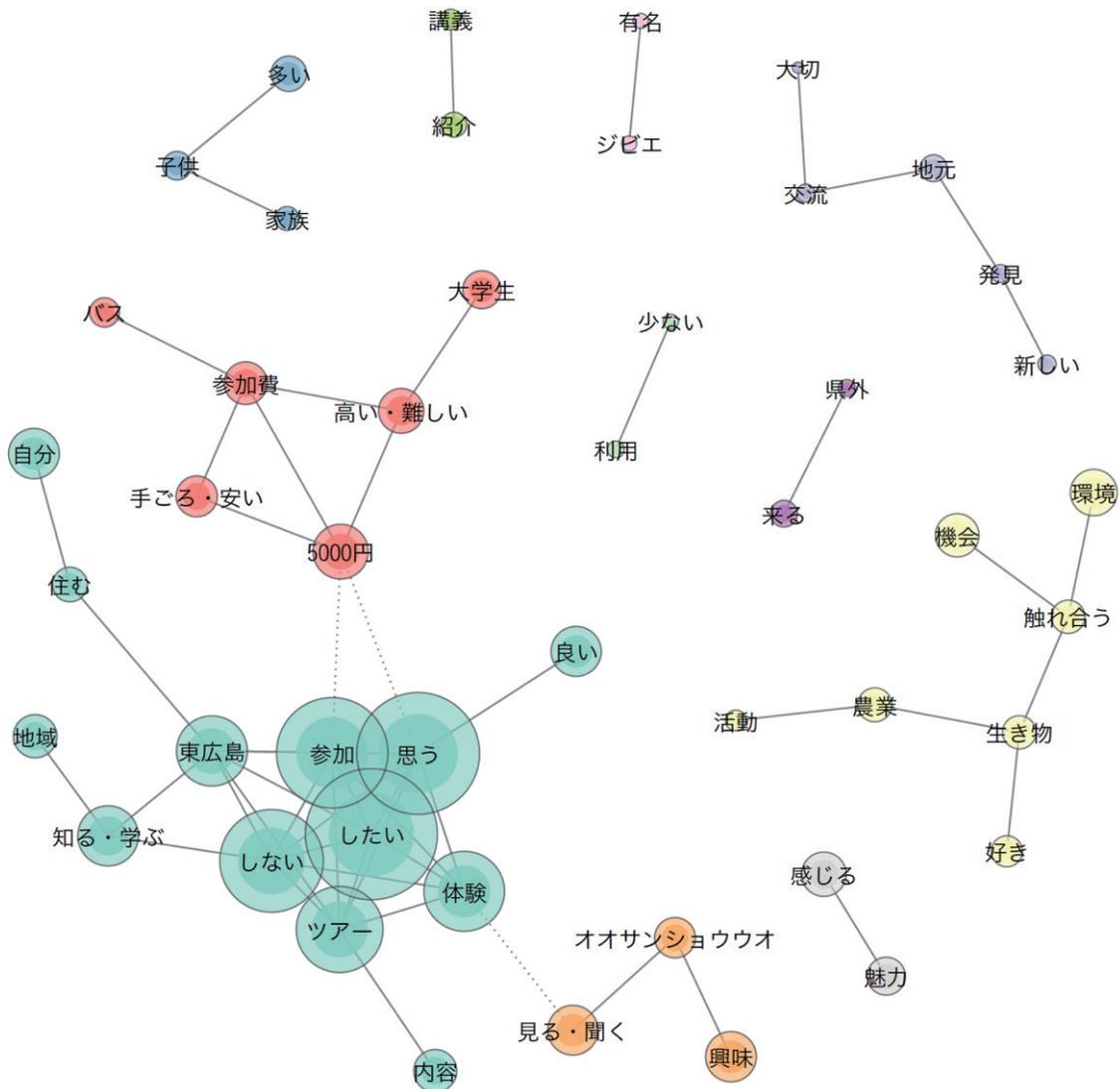


図3 エコミュージアム・ツアーについての学生意見の共起ネットワーク

注：図中の円の大きさは語の出現頻度を表す。Jaccard係数1.0以上の結びつきは線で表されている。実線・破線の違いはグループ(色分けされているもの)内の結びつきとグループ外との結びつきを示すもので強弱を示したのではない。

て、「高い」「高額」「高価」「きびしい」「厳しい」「難しい」「むずかしい」を「高い・難しい」にまとめたという処理を行った。

2. 共起ネットワークからみた回答の傾向

質問で参加したいかどうかを尋ねているので、回答の傾向としてもそれへの回答が多い。図の左下の大きな塊をみると「参加」「したい」と「参加」「しない」が拮抗していることがわかる。参加と、「東広島」に「住む」「自分」とか、「東広島」や「地域」を「知る・学ぶ」が結びついており、自分が住む地域を知ることが参加の動機になっていると推測できる。また、「5000円」の「参加費」も参加と結びついているが、料金の評価については、「手ごろ・安い」と評価する回答者と、「大学生」には「高い・難しい」と答える回答者に2分されていることがわかる。この図からは読み取れないが、個別の回答を読んだときに、参加しないと答える場合の理由はほぼ参加費が高いことを指摘していた（興味がないという回答もあったがわずかであった）。

図中のその他の部分の多くは、ツアーを高評価するか、自分の関心があるものに関わる記述である。図右側の「生き物」と「触れ合う」ことが「好き」とか、「環境」と「触れ合う」「機会」が今はないのでよい機会になるというものや、「地元」の「交流」は「大切」で「新しい」「発見」が期待できるとの記述も多い。「オオサンショウウオ」への「興味」や「ジビエ」への関心が示される一方で、この企画は「子供」向け、「家族」向けではないかという指摘もみられた。受講者の多くが未成年であることもあり、Ⅲのウェブアンケートと違い、酒や水への関心は示されず、生きものや農業、地域住民との交流などへの関心が高いことが確認できた。

図からは明確に読み取れないが、回答を読むなかで、今年は新型コロナウイルス感染症の影響で学生、特に新生は外に出歩く機会が大きく制限されており、入学したものの自分が住んでいる地域を見ることができていないとの不満を感じることもできた。そして、本件のような地域を見て歩くようなツアーに期待する声が多く寄せられた。地域まるごと博物館や域内を学ぶ機会を提供することの大切さをあらためて実感したところである。

V. おわりに

エコミュージアムにおいて、サテライト間の有機的な結びつきをつくることは大きな課題である。サテラ

イトの情報を提供して、来訪者が自由に見て回るだけでは十分ではなく、先進的な地域ではガイドによる案内や見学ツアーの提供など、サテライトを見て回る機会をつくっている。東広島市で、地域まるごと博物館を試行するために、本研究では域内の見学ツアーに対する需要を把握することにした。そのために5つの案を提示し、その需要について広島県民を対象とするウェブアンケート調査と大学生への意見聴取という2つの方法で調べた。

ウェブアンケートからは、「水と酒造り・米作り」の56.0%から「伝説と地域の歴史」の30.3%までテーマによって差はみられるものの、3割から5割程度の関心があることが確認できた。広島大学総合博物館が主催する見学会としてだけ考えるならば、十分すぎるほどの需要がある。ただし、博物館の行事としてだけでは経済効果はほとんどなく地域への還元にならない。周辺地域においてエコミュージアム・ツアーを成立させるためには、民間事業者との連携が不可欠で、観光事業化をめざすことが望まれる。その前段階として博物館が域内の見学ルートを探索・開拓していく役割を担うとともに、エコミュージアムであるために、市民からも一定の支持がある教育的側面を堅持すべきであり、博物館の見学ツアーとして「地域に学ぶ」魅力や意義を示していかなければならない。

地域をまるごと博物館と考えるとき、学園都市でもある東広島市では大学生に対する学びや体験の場の提供を意識する必要がある。課題への回答をテキスト分析したところ、地域を学ぶことへのニーズが高く、地元の住民との交流への関心、生き物など自然とのふれあいや、農や食の体験などへの関心の高さが認められた。大学生に地域を知る機会を提供することは重要で、大学博物館としての広島大学総合博物館は、その責を担うべきである。

エコミュージアムには、地域の自然・文化遺産を保存し、研究し、活用することが求められる。その際の課題の1つに、サテライトに位置づけた地域の遺産をいかに結びつけていくのがある。本研究では、市の周辺地域の観光振興を促すことと、博物館活動としての教育的側面との両立を強く意識した。その上で、社会見学的なツアーを考案したが、これらについて広島大学総合博物館がその事業を行うに十分な需要があることを確認できた。しかし、そこから経済的な効果を生み出せるようにするには、連携すべき事業者や地域の協力者の開拓、情報発信の工夫、見学ツアーの内容の充実と費用の低廉化、頻度の拡充など、対応すべき課題は多い。また、エコミュージアム研究の観点か

らは、サテライト見学ツアーをエコミュージアムの活動内容とすることの是非、観光と教育のバランスのとおり方、観光化と遺産保存の両立のさせ方など、議論の余地がある。少なくとも、本研究によって、エコミュージアムはサテライトを結びつける仕組み・仕掛けづくりに積極的・実践的に取り組むべきだという立場には、一定の社会的支持があると示すことができた。

【謝辞】

ウェブアンケート調査について科学研究費（基盤研究（C）, 19K01186, 代表：浅野敏久）を使用した。また、本文中に記したとおり、ツアー案の考案等で東広島市との共同研究の知見を参照した。テキストマイニングに関して、樋口耕一氏のフリーソフト KH Coder を使用した。

【注】

- 1) 三浦半島まるごと博物館では、神奈川県や関係市町などで構成する連絡会によりガイドブックを作成したり (<https://www.pref.kanagawa.jp/cnt/p1093180.html> (2020年8月10日閲覧)), エコミュージアムガイドツアーを企画・実施したりしている (<https://www.pref.kanagawa.jp/cnt/p532436.html> (2020年8月10日閲覧))。
- 2) 令和元（平成31）年度大学連携政策課題共同研究事業市提案型共同研究（ニーズ型）として「エコミュージアム構想に基づく周遊観光ツアーに関する研究」を実施した。
- 3) エコミュージアムについての活動紹介ビデオ。 <https://home.hiroshima-u.ac.jp/museum/ecomuseum.html> (2020年8月10日閲覧)。
- 4) 東広島市（2018）の「本市の観光客の状況」の記載や、市や観光協会など関係者からの話などによる。前掲注2の共同研究はこの認識を問題意識として企画されたものである。
- 5) 東広島市が市周辺地域を周遊する観光ルートづくりに関わるモニターツアーを2019年度に実施した。3つのツアーを実際に企画し、参加者を募集したところ、各回とも問題なく参加者を確保することができた（3回目は新型コロナウイルス感染症の影響で集客までで実際のツアーは中止になった）。10～20人程度の参加者を年3、4回実施することについて集客できないということはなさそうである。
- 6) 参加費5,000円は、20人の参加者を集めるとして、バスの借り上げ代が70,000円、食費が1人1,000円、現地の協力者への謝金等10,000円としたときの費用を頭割りしたものであり、ほぼ実費（実際には赤字）になる料金設定である。

- 7) ある語Aとある語Bのいずれか、または両方が出てくる文のうち、語Aと語Bの両方を含む文の数の割合を指す。割合が高いほど、語Aと語Bが1つの文中で同時に使われていることを示し、結びつきが強いと判断する。

【文献】

- 安藤竜二（2018）：朝日町エコミュージアムについて—住民一人ひとりが学芸員。エコミュージアム研究, 23, 4-12.
- 江水是仁（2016）：学芸員養成課程から見たエコミュージアムを活用する意義。エコミュージアム研究, 21, 23-29.
- 大原一興（2018）：エコミュージアムとコミュニティミュージアム。エコミュージアム研究, 23, 54-66.
- 大山由美子（2018）：エコミュージアムとダイバーシティ—今日的な課題に向けたミュージアムのあり方。エコミュージアム研究, 23, 28-33.
- 菊地直樹（2016）：エコミュージアムとジオパーク。エコパーク—お互いの経験から学び合う。エコミュージアム研究, 21, 52-55.
- 菊地直樹（2018）：ジオパークとエコパークとの比較からみるエコミュージアムの現状と課題。エコミュージアム研究, 22, 30-37.
- 小出美由紀・浅野敏久（2016）：地域博物館活動に関する意識調査報告—地域博物館は市民活動のコアになりうるか。エコミュージアム研究, 20, 58-64.
- 中川宏治（2016）：国際協力活動の一環としてのエコミュージアム導入の取り組み—メルー国立公園における青年海外協力隊の活動を事例に。エコミュージアム研究, 20, 51-57.
- 馬場憲一（2018）：日本におけるエコミュージアムのあり方について—博物館機能論の視点から。エコミュージアム研究, 22, 15-20.
- 馬場憲一・須田英一（2016）：大学が主体となったエコミュージアムの取り組みについて—その活動の実態と課題を中心に。エコミュージアム研究, 20, 42-50.
- 東広島市（2013）：『平成25年 東広島市中心市街地活性化基本計画』東広島市。
- 東広島市（2018）：『東広島市観光総合戦略』東広島市。
- 樋口耕一（2020）：『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—第2版』ナカニシヤ出版。
- 広島大学総合博物館（2020）：『エコミュージアム構想に基づく周遊観光ツアーに関する研究報告書』広島大学総合博物館。
- 吉兼秀夫（2016）：エコミュージアムの変化—ベルギー・フランスのエコミュージアム報告。エコミュージアム研究, 21, 15-22.

(2020年8月31日受付)

(2020年12月16日受理)